

医史学と私

——名古屋周辺地域の研究会エピソード——

青木 國雄

名古屋大学名誉教授

恩師日比野進先生（名古屋大学教授）のご示唆もあり、1961年前後に日本医史学会に入会した。その後まもなく米国留学したため一時退会、1971年前後に再入会したので、会員歴は半世紀を超える。疫学に関連した医学史研究はつづけたが、いろいろな事情で日本医史学雑誌への投稿は無に等しく、このコラムに寄稿する資格はないと思った。しかし古い会員として、地域の医学史研究会の昔話は記録しておく義務もあると考え、本稿をまとめた。

この地方には戦前から服部敏明先生や芳川芳秋先生など著名な医史学者がおられ、貴重な著書を刊行されていたが、研究者数が少なく定期的な研究会はなかった。芳川先生は医師ではなく、植物学、本草学の研究から、江戸時代から明治時代に至る先覚的医学研究者についての多くの著書が出版されており、この地方での定期的な研究会の必要性を説かれていた。医史学に関心の高かった日比野進教授は、愛知県医師会で刊行されている「現代医学」誌に、1972年より医史資料のコラムを新設、この地方の医学史研究の記録保存を図られ、以降、芳川先生の玉稿がたびたび掲載されている。私は1959年より現代医学の編集幹事を仰せつがっていたので、芳川先生はじめ諸先達に接する機会を持つことができたには幸いであった。研究者が東海地方に散在しており、研究会は稀であった。

1967年、名古屋での第17回日本医学会総会の折、第67回日本医史学会が戸刈近太郎会長（名古屋名誉教授）の下に開催され、この地方からもかなりの研究者が参加、これがきっかけで研究会が始まった。1973年、岡田博名大教授（予防医学）が

地域の研究者に呼び掛け、第1回東海医学史研究会が発足した。1977年には、岡田博先生（当時愛知医科大学）が第78回日本医史学会会長として、岐阜県各務原市で総会を主宰された。その後、前記研究会は中断してしまっただけでなく、関係者が種々検討したが、この会合の継続は難しいとわかり、日比野進先生（当時国立名古屋病院長）は定期的研究会の重要性を考えられ、名古屋の医学史研究者や愛知県医師会とも相談され、新たに名古屋医史談話会を組織された。この研究会は1989年6月より開始され、年数回開催、参加者も漸増し、論議も活発となった。その詳細は第120回日本医史学会総会で会員に配布したDVD（参考文献）に詳しいので省略する。1993年、日本医史学会東海支部（支部長日比野進）が成立したので懇話会運営は支部に受け継がれた。1995年には第96回日本医史学会が日比野進会長の下で開催され、盛會裏に終わり、学術展示を含め、内外から評価されたことは研究会にとって励みとなった。私は名倉道治会員とともにこの総会の副会長を務め、いささかの貢献をすることができた。

1980年代には酒井恒名大教授がターヘル・アナミトアの完訳をされ、その出版に、当時名大出版会理事をしていた私が斡旋の労をとらせていただいた。これについて、後日小川鼎三先生から謝辞を賜った思い出がある。

医学・医療にとって、歴史的な知識と考察がなければ、新しい進歩は期待できない。この地方には多くの医史学研究者が潜在しており、新しい発展を願っている。

参考文献

芳川芳秋. 名古屋における医学史発達の歩み. 東海医学
史研究会; 1973.
日本医史学雑誌. 第96回日本医史学会総会抄録号 (第

41巻第2号). 1995.

山内一信・高橋昭・青木國雄編. DVD: 名古屋医史談
話会の歩み シジホスの会 知られざる国際的業績
に輝く4先哲. 予防医学広報事業団 (青木平八郎・國
雄記念); 2019.